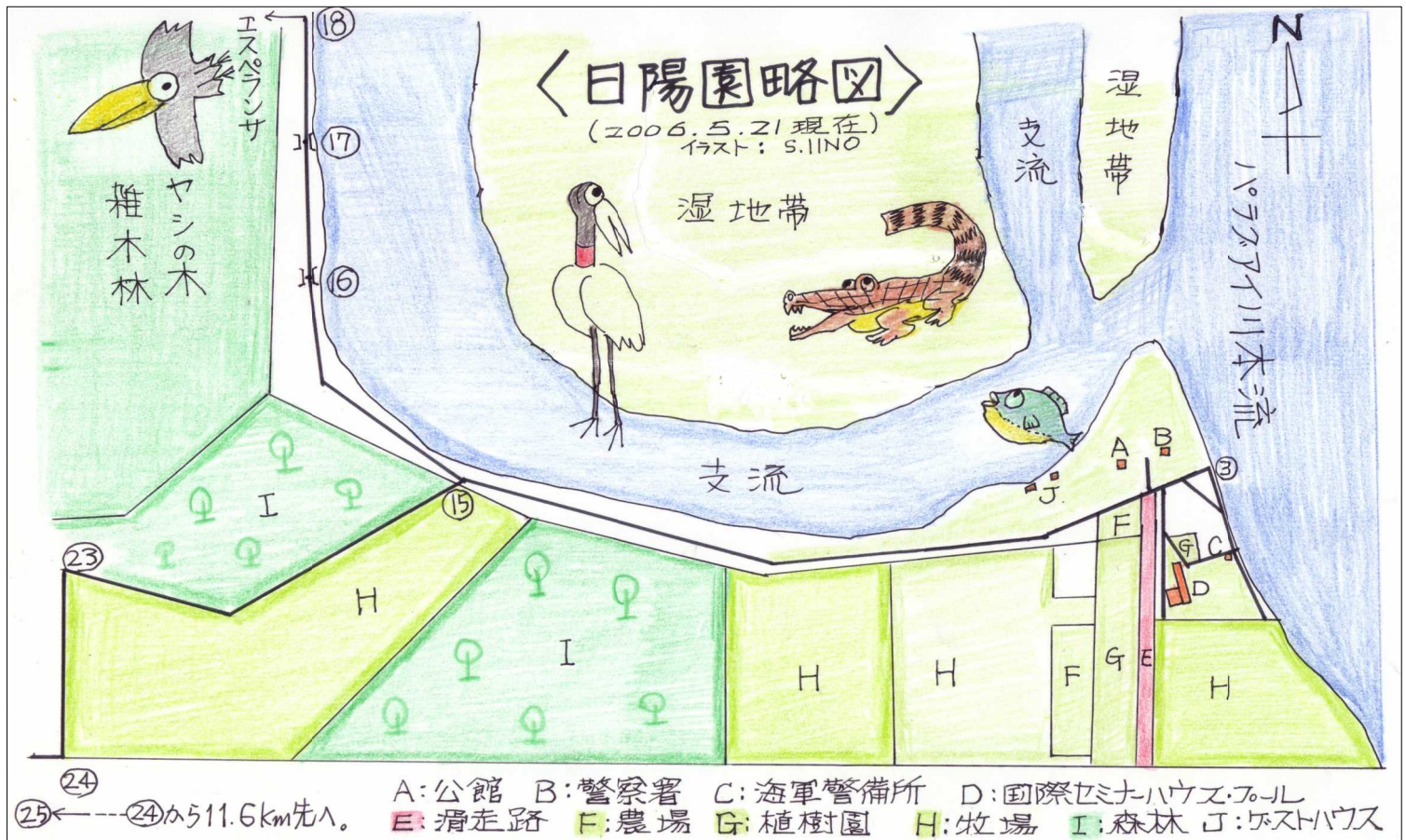


パンタール通信

南北米福地開発協会 会報 2006年7月1日発行 第34号



大自然の天国

今日は 支流沿いに北の奥地を訪ねたコース、と 境界柵沿いに西の奥地を訪ねたコースの紹介を致します。

支流沿いに北の奥地を訪ねて

第一船着場から、エスペランサ村へ通ずると言う五・六kmの所にある基点石(十八番)までは、基地を支流に沿って東から西へ進みながら、スウーと支流沿いに回りこむ形で北上して行くコースであるが、絶えず水辺を走るだけに、ワニやトゥユウや水鳥の群れに出逢うことが多い。

繁殖期の後には、親子ずれのダチョウや鹿などの動物にめぐり合うこともある。家畜の牛や馬の親子も水辺で草を食み、のどかな大自然が視界を覆い尽くす。小鳥の鳴き声も賑やかである。緑のアゲアツペや葦のような水草は、魚達の餌や卵を育てる隠れ家でもある。

とりわけ、支流沿いに道路が造られ、

第一の橋(十六番)、第二の橋(十七番)が造られて、車が行けるようになったことは、ツアー客には、感激だ。ただし、六月から十月位までは、水位が上がり、水没するので、この時期は残念ながら避けなければならない。橋の近辺の支流にはバクやボガが沢山釣れる漁場ともなっている。餌のあるところには、空も陸も水も全ての生き物が群がってくる。

境界柵沿い道路に沿って

西の奥地コース

隣の牧場が既に境界沿いに四十kmの道路を造っているために、その道路を走って、バイアネグラーフェラデルフェアに繋がる公道に至ることが出来、陸の孤島から生活のパイプラインが結ばれた感がある。我々のサイドでは、第一船着場(三番、地図参照)から、基点石十五番、二十三番、二十四番を通って、二十五番に至る十五・八kmの道が造られ、いつでも探索エコ・ツアーが可能である。

コースとしては、十五番までは コースと同じだが、それ以降、支流から左に折れて、牧場を左手に見ながら奥へと進むコースである。特に二十四番以降の境界線沿いの柵に沿った西への四・八kmの道のりは、隣が牧場で切り開かれてしまっている為、自然のジャングル状態のままの我が敷地の森には、沢山の鳥や動物達が住み着いている。

木々の天辺にはしばしば大小様々な鳥がじっと止まっているのを発見する。パードウォッチングには最高の場所である。大きな木の上に大型の鷹が止まっていたが、我々を警戒して見張っているのかと思いきや、瞬間にサーッと舞い降りたかと思うと、蛇をしっかりと足に掴んで舞い上がってきた。木の上は身の安全と共に、餌を見つけ捕らえるチャンス wait していたのだ。



第二の橋で甲羅干しするワニの群れ



レダの朝は黄金の輝きで明ける

かと思うと、静かに走り行く車の前方三十m程に、突然黒い狐のような動物が二匹戯れながら道路に出てきた。まだ生育しきれていない兄弟のようで、遊びが楽しくてしょうがないという感じでじゃれていたが、こちらに気づき、車の音と姿に一瞬驚いたようだが、逃げずにじっと様子を見ている。こちらが止まると、又じゃれ始め、サツと草むらに隠れたと思ったら、車のすぐ脇に可愛い姿をひょっこり見せて又草むらに消えて行った。愛嬌がある動物だ。

暫く行くと今度は、道路に陸亀がゆっくりと歩いていった。直径が四十cm以上はあるだろう。黄色い斑点のある綺麗なおとなしそうな亀であった。同行していたレダ警察署長さんが、「基地に持って帰ってセニョール飯野の妻に見せてあげたらどうか。」と言ってきた。

「いや、自然のままに置いてあげた方が亀にはいいのだ。」と答えると、「あなた方は自然を守る人々ですね。」と言っていた。実際、実物を生きたまま妻にも見せてあげたい思いも起きたが、それ以上に、現地の人は、ワニでも亀でも捕まえたから食べてしまう可能性が大きいので、連れて帰らない方がいいのだ。



第二の橋でトゥユユと群れをなすコンドル



木の上で睨みをきかす大型の鷹

多分九官鳥の仲間と思われるが、トゥユユと共にパンタナールの鳥のシンボルである、くちばしの大きく黄色いオオハシが二羽、「コロコロル、コロコロル」と涼やかに鳴きながら、飛んでいった。皆にも見せてあげたいのに、カメラは間に合わない。

道路につがいのトゥユユがゆっくりと歩いていった。車を静かに止めて、道から外れていくのを待った。やがておおらかに2mほどもある両翼を上下しながら仲良く空に舞って行った。美しい飛び方にしばし感動しながら見とれていた。気がついたらビデオカメラは止まったままだった。

やはり、出かけてきてこの感動は体験するのが一番いい、としみじみ思った。
(飯野記)



体長10cmほどのハチドリ

レダ農場にて人類の食料問題解決の道を探る！！



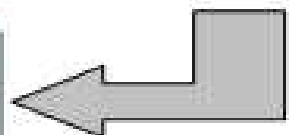
稲作、作付回数、時期、収量

レダでは、2005年の10月から、稲作に関する実験が本格スタートした。40m×40mの田んぼが5面準備され、米の品種別あるいは、苗の田植え式と種の直播式などの違いによる生育研究などが始まった。林農業担当委員長、吉澤顧問、西氏などの農業プロジェクトチームが現地入りして、船見氏、伊達氏などが継続して担当してきた。3ヶ月で収穫が出来る。2月17日稲刈りが行なわれた。

月 度												評価項目										計
7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	田代	育苗	田植	田代	田入	田代	田代	田代	田代	田代	田代
■種 直播 苗											■種	4	4	5	5	5	3	5	3	5	2	41 畝
南風				雨期			猛暑					5	5	5	5	4	5	3	5	3	1	41 畝
												2	2	2	5	5	5	5	5	5	2	28 下

【結論】

1. 最速期間 : 7月～10月
: 11月～ 2月
2. 鳥害対策を“最重要取り組み”事項とする



野生生物はどうしてへっているのか

どれほどへっているか

40億年前、地球上に生命が誕生して以来、生命は進化しつづけ、たくさんの生物の種が生まれた。

現在、その数は500万から1000万種といわれる。科学的にあきらかにされている野生生物の種は、そのうちの約140万種ほどである。科学的に分かっているものも、分かっていないものも、いま多くの生物の種が絶滅したり、絶滅しようとしている。生物は進化していくあいだに、気象や地形などの変化や生物の種おしの競争によって、これまでも多くの種がほろんでいった。自然のなかでおこる種の絶滅は、長い時間をかけておこなわれている。

いま進行しつつある生物の種の絶滅は、地球の歴史がはじまって以来のスピードなのだ。

生物の種の進化の歴史の中で、短期間に大量の種が絶滅した時代もあった。いまから6500万年ほど前、恐竜をふくむ多くの生物の種が突然のように絶滅している。地球規模の環境の変化が原因だが、この時代でも、およそ1000年の間に1種の生物種が絶滅したと考えられている。ところがいまは、2020年までに50万種から150万種が絶滅すると予想されているのだ。

なぜ野生生物を守らなくてはならないのか

①健全な地球環境を守るため

野生生物を守るということは、かぎられた生物の種だけを守ることではない。地球上のさまざまな野生生物が、生きていけるようにすることなのだ。

さまざまな生物がいることは、われらが生活をしていけるほどさまざまな環境があるということなのだ。そして、地球上のすべての生物の種は、生態系（→10ページ）の一員として、人類もふくめてたがいに関係しあっている。だから、さまざまな生物が生きていけるということは、地



▲けがをして保護されたミツユビナメケモノ

球の環境はよいという基準のめやすになるのだ。

②生物資源を守るため

これまでも人間は、野生の生物から、食料や燃料、衣料品や薬の材料をえてきた。利用してきた生物の種が一度ほろびると、ふたたび人間の手で作りだすことはできない。まだよく知られていない生物の種がほろぶことは、薬の材料や作物の品種改良に役立つなど、人類が将来生きていくのに必要な大切なものを失うことを意味するのだ。

③心のうるおいを守るため

さまざまな生物は、科学研究の材料や、絵や音楽の題材になっている。草花や野生の動物を見たりすると心はれる。野生生物を守るとは、精神的な豊かさを守ることなのだ。

野生生物がへっている原因

国際自然保護連合の調査によると

つぎようになる。
①野生生物のすみ環境が破壊されたり、悪くなるため。

とくに、熱帯雨林の破壊や悪化は、野生生物がへる大きな原因となっている。熱帯雨林は、地球上の生物の種のほぼ半分がある。この熱帯雨林をふくむ熱帯林が急速にへりつつあるため、2020年までに、全世界の生物種の5～15%、50万種から150万種が絶滅すると予想（世界資源研究所の1989年調査）されている。

②人間による乱獲のため。

③新しく入りこんだ動植物の影響。

④食べものの不足。

⑤農作物や家畜を守るために殺害。



インドサイの親子 インド・アッサム地方に千数百頭しかいない。

レダに住む 貴重な陸カメ



体長 40cm位

二〇〇六年度 環境セミナー
第三回 九月一七日

午前10時～午後5時まで

場所：南北米福地開発協会事務局

費用 三千元（昼食付き）

内容 地球温暖化と植樹の重要性、レダ開発について

第四回 一二月一七日

詳細は後ほど連絡します。

南北米福地開発協会 事務局

〒二二一〇〇〇一

神奈川県川崎市高津区

溝口三十一番十五

岩崎ビル四F

電話 〇四四一八二九一二八二

Fax 八二九一二八二〇

会費納入 郵便口座

一〇一八〇一七七六八〇四七一

代表 柴沼邦彦